

初戦力に定住外国人を

県 介護職員の養成事業開始

高齢化を見据えて、介護に必要な日本人の介護職員を確保し、県は二十日、県は二十日、定住外国人に介護職員の養成事業を開始する。本年度は県内に住む外国人に介護職員の養成事業を開始する。本年度は県内に住む外国人に介護職員の養成事業を開始する。

人配偶者十九人が受講。研修は草津市の多文化共生支援センターで週四回実施する。十月月中旬まで日本語を八十時間、以降は介護職員初任者研修を百二十時間行う。受講料は無料、テキスト代は自己負担。講師は県の委託を受けたNPO法人が担当。修了者は介護福祉士へのステップとなる初任者研修終了者として認定される。二十四日の第一回研修では、授業のほかに

簡単な日本語で事務手続きなどを確認。フィリピン出身で野洲市の山本ジェニファーさん(三三)は一介護を仕事にしたいが、夫の親の役にも立ちたい。日本語と日本文化を研修で学びたい」と話した。県内の介護職員は二〇一三年度末現在の推計で一萬六千五百人。団塊の世代が七十五歳以上となる二五年度は二万五千人が必要と見込まれる。多様な人材の確保が求められるが、外国人にとって言葉が壁になることも多く、県は今回、国の一部補助を受け七百万円で事業化した。(井上靖史)



介護の研修を受ける定住外国人の人たち
草津市の多文化共生支援センターで

琵琶湖上で課題考察

再生法案提出へ衆院議員、り

琵琶湖の保全を国が支援する琵琶湖再生法案(仮称)づくりの反映させようと、衆議院環境委員会委員十九人が二十四日、県内を訪れ、可決の見通し。

琵琶湖の保全を国が支援する琵琶湖再生法案(仮称)づくりの反映させようと、衆議院環境委員会委員十九人が二十四日、県内を訪れ、可決の見通し。



黄金色に輝く田んぼで進む稲刈り作業＝東近江市小倉町で

黄金色

県内で米の収穫を迎え、黄金色に輝く田んぼの中で、農家たちが稲刈りに追いついている。

作付面積の広い江市では、米農家川島さん(六八)がコシヒカリを使っている。十平方メートルの米を栽培し、二十四日は甘粘りが強い品種「かがみ」の稲六千枚を刈り取った。「今年は昼間

外来のオオバナミズキンバイが繁殖する様子や、昔より漁獲量が減った近江八幡市の沖島の漁場、一度埋め立てられた後に再生された長浜市の早崎内湖などを見て回った。あいつで北川知克委員長は「近畿千四百万人が利用する水。新たに作る法律で進める」取り組みが全国の湖沼再生の先例となるようにしたい」と述べた。琵琶湖再生法は、琵琶湖が近畿や日本全体の資源ながら保全をほば滋賀だけが担う実情の改善を訴えて県が整備を求め、二〇〇八年ごろから議論がスタート。

基本方針に基づいて県が保全再生計画をつくり、財政支援を受けて実施するのが主な内容となる見通し。(井上靖史)

「豊かさ指数2位」

知事に独自の提言

滋賀経済同友会

十月末までに県が策定する地方創生の総合戦略に生かしてもらおうと、滋賀経済同友会

は二十四日、人と企業の豊かさを表す独自の指標を盛り込んだ提言を三日月大造知事に提出した。提言は同友会内の「滋賀創生戦略研究会」でまとめた。平均年収や合計特殊出生率、完全失業率などから算出する「人と企業の豊かさ指標」を独自に考案。二〇一三年時点では、滋賀県は愛知県に次いで全国一番目



提言書を手渡す吉表幹事ら(右)県庁